



イベント

第三陣の南京大虐殺歴史記憶継承者がスタート

重陽節に際して、当館では南京大虐殺歴史記憶継承者の三回目の認定式を行った。曹玉蓉、王進勤、陳囿、任穎など9人の南京大虐殺生存者の子孫が証書を受け取り、正式に「南京大虐殺歴史記憶継承者」となった。

現在、認定された南京大虐殺生存者はわずか32名になっている。歴史の記憶を継承するために、2022年から南京大虐殺の歴史記憶を受け継ぐことを促進するプロジェクトを始め、継承者は生存者の二代、三代、四代に当たる人で、人数は今回の認定を含めて32人に上った。偶然にも存命中の生存者「32人」の人数と一致することになり、今後はより多くの生存者の子孫が記憶継承を責任を負うことになるかと期待している。



△南京大虐殺生存者の艾義英(左二)と劉民生(左一)が継承者に証書を授与



△当館館長周峰が継承者に証書を渡す



△第三陣の南京大虐殺歴史記憶継承者と生存者の艾義英(真中)、劉民生(右から五人目)

南京防衛戦で戦死したパイロットの子孫が訪れた

「この人は私の6番目の叔父だ!」 記念館の展示室で、75歳の易先徳は一枚の展示される写真を指差しながらそう語った。

「叔父」とは南京防衛戦で戦死した中国兵の楽以琴のことだ。1937年12月3日、日本軍機が南京を爆撃した際、中国空軍第4旅団第21戦隊の大尉兼副隊長であった楽以琴は、日本軍機との空中戦を展開。その戦いで敵機を撃墜した後、彼が23歳の若さで戦死した。

それから87年後、甥の李仙徳と姪の易先明は、それぞれ米国と四川省から南京を訪れ、親族の足跡を探してきた。



△楽義琴の親族は当館を見学



△記念館の勝利広場で、楽以琴の名が刻まれた黒い花崗岩に一礼して花を手向けた

音声による歴史記憶の構築

今年の国慶節連休中に、記念館は紫金草のボランティアと見学者を集めて、「記憶の声」朗読、「愛国の声」芸術劇、「平和の声」音楽会などのイベントを行った。

その中で、南京鐘英中学校二年生の生徒12人が、ラーベの日記とヴォートリン日記を読み上げ、「南京の子どもたち」として87年前の歴史記憶とつながった。

